

塚本直幸＝編著

ペリー史子・吉川耕司・波床正敏・伊藤 雅・南聡一郎＝著

路面電車レ・シ・ピ —住みやすいまちとLRT—

2019年3月発行
本体2,000円＋税
技報堂出版
ISBN 978-4-7655-4486-3



青木 亮
AOKI, Makoto

東京経済大学経営学部教授

読んで楽しく、見ていとワクワクする本である。フランスを中心とする欧州と、我が国での路面電車を活かしたまちづくりを簡潔に紹介すると共に、LRTによるまちの変化や導入の仕方をわかりやすく、かつコンパクトに解説している。

本書は全部で4章から構成されており、第1章では「トラムでヨーロッパ地方都市のまち歩き」として、フランスを中心に欧州の9都市の事例を紹介している。続く第2章は「暮らしに根付いた日本の地方都市の路面電車」として、日本で路面電車が存続している諸都市の中から9都市を取り上げている。欧州、日本ともに各都市はそれぞれ4ページでコンパクトに特徴をまとめており、多数の写真を載せたことで直感的に理解しやすくなっている。第3章と第4章は理論編とも言うべき存在で、第3章「LRTがもたらすまちの変化」では、LRT整備がまち作りに与える影響を論じ、第4章「LRTをつくるためには」で、LRT導入の要件や制度、社会的合意形成の問題などを取り上げている。

本書は、著者らによる科学研究費助成を得て進めてきた研究と論文がもとになっており、成果の一部を一般読者向けにわかりやすく解説している。まち作りや再開発に路面電車を絡める手法は、フランスをはじめとする欧米都市で1980年代から多く導入されており、各地で成功例が増えると共に日本でも広く紹介されるようになった。近年は欧州の路面電車やまち作りについて多くの情報がネットや書籍で入手可能になっているが、路面電車がまち作りに果たす影響を理解してもらうには、『百聞は一見にしかず』ではないが、写真・ビジュアルの果たす役割は大きく、本書は読者に十分、都市と路面電車の魅力を伝えている。

ただし、若干だが気になった点も存在する。まずはお願いであるが、紹介している各都市や路面電車について、選定した

理由や、都市の人口や位置、路線図や路線長など、概略の分かる記述があるとわかりやすかったであろう。一部の都市で記載もあるが、特に欧州の地理に明るくない読者のことを考えると、これらの情報があればより理解が進んだと思われる。また一部の写真については、主題をより強調、わかりやすく明示するためアングルやトリミングに、もう一工夫を望みたい気がする。もちろん、本書で取り上げた都市の一部は書評の著者も訪れたことがあり、希望する構図で撮影するには手間以上が必要になることは十分承知しているが、多少気になる写真も存在している。

LRTの効果や整備に向けた方策を取り上げた第3章、第4章は、一般読者向けに平易に記述されている。研究者が書くと、正確性や多くの情報を提示しようとして難しくなりがちであるが、本書は外国の制度や我が国の課題と絡めて、コンパクトにうまくまとめられている。その反面、運行委託制度や内部補助、社会の合意形成など、経済学をバックボーンとする研究者の立場からするとやや説明不足や掘り下げ不足と感ずる点も散見される。例えば路面電車の赤字を他部門からの内部補助で穴埋めする提案は、内部補助の理論的課題や日本での実現可能性について既に様々指摘されていることでもあり、説得力ある議論とするには、もう一段の論理展開が必要でなかったかと思う。学術研究を背景とする書籍であるだけに惜しまれる。

長年に渡り関係者の間で議論は続けられてきたが、路面電車の新規導入は富山や、これから開業する宇都宮など、我が国ではまだ少ない。本書により、読者の多くがまちづくりにおける路面電車の魅力を感じ取り、今後の整備、発展につながることを希望したい。